東から西へ、そして西から東へ
―「ヨーゼフ・ロート国際会議」を訪問した話

依　田　哲　朗

「ヨーゼフ・ロート国際会議」と件名に書かれたメールを、私のウィーン大学留学期間中、指導教授を務めてくださったクリスティーネ・イヴァノビッチさんからいただいたとき、私はウィーン7区にあるLiteraturhaus（文学の家）の中で、遅々として進まない演劇『ラデツキー行進曲』の劇評執筆に頭を抱えながら、机の上に積まれたロート研究の資料を渉猟していた。早速、イヴァノビッチさんが送付してくれたメールにざっと目を通してみると、“Joseph Roth Tagung, Łódź (17.-18. 10. 2019)“と会議の日時と場所が記されている。どうやらŁódźというオーストリア国外の場で会議が行われるらしいことと、劇評の提出〆切日に会議の開催日時が近いことが、私の気持ちをどんと暗くさせる。今、オーストリアを離れてしまったら、まったく進んでいない私の執筆作業がさらに滞ることは間違いない。そして、出不精で旅行嫌いの私が、オーストリア国外へ出国するにあたって準備しなければならない宿泊施設の確保だの、交通の調査だの、所持している携帯電話は国外でも使えるのか、などといったことを考え出すとパニックにも似た過呼吸を発症するのであった。

パソコンの画面を睨みながら、あれやこれやと考えなければならないことに耐えがたい苦痛を感じた私は、Literaturhausを出て頭をクリアにしようと、マリアヒルファー通りを国立図書館の方向に向かって歩き出した。カフェのテラス席に陣取ってのんびりおしゃべりする老人たち、楽しそうにデパートで買い物をして、腕を絡めながら寄り添う恋人たち、露店で買ったケバブを頬張りながら缶ビールで流し込む元気の良い若者たち。そんな平和なウィーンの風景の中を歩いていると、文学研究や、異国での生活に切羽詰まっている自分が、ちっぽけでつまらない人間に思えてくる。マリアヒルファー通りから国立図書館の建物が見えるところまで来ると、10月になってすっかり肌寒くなってきたウィーンの気候も影響しているのか、くさくさした私の気分は頂点に達し、図書館なんかに行かずに酒でも飲むかということになっていた。

歩いてきたマリアヒルファー通りを少し戻り、一本の路地へと入っていくと、私のお気に入りのCafe Kafkaが現れる。座り心地の良い年代物のソファーに腰かけ、注文したビールをチビチビと飲んでいると、乱れていた呼吸がじょじょに正常なリズムを取り戻してきた。日本にいた頃「ビールは苦味だ」と頑なに思い込んでいた私は、ウィーンに来た当初、そのフルーティで甘ったるいオーストリアビールの味わいに辟易としたものだったが、毎日のように飲んでいるとこれはこれで慣れてくるもので、近頃では不思議な愛着も感じ始めていた。ビールを一杯飲み終わる頃には気分も良くなっていて、私はリュック

ザックの中からパソコンを取り出し、気を取り直して「ヨーゼフ・ロート国際会議」について調べ始めた。そもそも会議が行われるŁódźとは、どこの国の都市なのだろうか。字面だけ見ると非常にエキゾチックな印象を受けるので、ウィーンからほど近い東欧チェコやハンガリーに存するのかもしれない。しかしながら、Googleの検索欄にŁódźと入力すると、私の予想は見事に外れ、ウッジ（Łódź）がポーランド第二の都市であるということが分かった。ポーランド？何で、ポーランドなんかで「ヨーゼフ・ロート国際会議」が行われるんだ？そういえばロートはウィーンに来る前の一時期、ポーランドの大学に籍を置いていたこともあったな、などと考えながら私はとりあえずウィーンからŁódźまでのルートを検索してみた。推奨されるルートはウィーンからワルシャワまで飛行機で行き、そこから鉄道を使ってŁódźへ行くというものである。しかしながら、同時に表示されている飛行機の往復料金300ユーロに私は尻込みした。国費留学生だった私は、オーストリア学術政府から月額1050ユーロの給付金をいただいていたが、そこから家賃600ユーロと健康保険の150ユーロが引かれるので、私が自由に使えるお金は毎月300ユーロのみだった。もし飛行機を使った場合、その自由に使える300ユーロは、一瞬で吹っ飛ぶことになる。私はすぐさま機転を利かせ、飛行機ではなく、バスで行くポーランドのルートへ活路を見出そうとした。すると、フリックスバスという長距離バスを使えば、何とウィーンからŁódźまで往復わずか14ユーロで行けることが分かった。途中の乗り換え時間まで含めると片道12時間もかかるということだったが、この際、背に腹はかえられない。交通の便は何とかなりそうだとふんだ私は、次に宿泊施設を調べ始めた。「Łódź　Hotel」とGoogleの検索欄に打ち込むと、何件かのホテルが宿泊先候補として表示される。その中の一件のとあるホテルに、私の目は釘付けになった。「サヴォイホテル」―ヨーゼフ・ロートが自身の小説タイトルに冠したまさにそのホテルの名前が、私の宿泊先候補として挙がっていたのである…。

12時間のバス旅を経て何とかŁódźまで辿り着いたときには、外はすっかり暗くなっていた。私と同じバスからŁódźで降りた女性がいたので、すぐに捕まえて「サヴォイホテルまで行きたいのですが…」と尋ねると、彼女の行き先の途中にちょうどホテルがあるということなので、運よく同伴してもらえることになった。いよいよサヴォイホテルに到着し、入り口をくぐると、エキゾチックな顔立ちをした受付の若い女性と、ブルージーンズにくたびれたワイシャツを着た男性が、何やら楽しそうに会話をしている。受付で英語を使ってチェックインの手続きを済ませると、椅子に座っていたその男性が立ち上がり、エレベーターの扉を開けて「中へどうぞ」と合図した。彼はホテルのエレベーターボーイだったのである。昔の白黒映画に出てくるような古風な作りのエレベーターに乗り込み、箱が静かに上昇していく間、このエレベーターボーイは私にポーランド語での挨拶を教えてくれた。原作の『サヴォイホテル』では、エレベーターボーイが実はホテルの支配人であったことが明かされるので、「あなたはこのホテルの支配人じゃないですか？」と尋ねてみようとも思ったが、長旅ですっかり疲れていたので、また次回にすることにした。

少々古めかしい感じは否めないが、逆にその気取らない部屋の雰囲気に安心したのか、

私はサヴォイホテルに滞在している間、毎晩ぐっすりと眠り込んだ。そのため、長時間にわたって行われた「ヨーゼフ・ロート国際会議」でも、非常に高い集中力を保って発表を傾聴することができた。マリア・クランスカ（Maria Kłańska）、ハインツ・ルンツァー（Heinz Lunzer）といった高名なロート研究者たちも登壇し、有益なロート研究に関する情報を得ることもできたのだが、発表の間、少し私が残念な気分になっていたことも告白せねばならない。これはロートの故郷ガリチア（現ウクライナ）に程近い、東欧ポーランドという地で会議が行われたこととも関係しているためだろうが、多くの研究者がロートと東欧の親密な関係性を示す、アーカイブ資料を活用した実証主義的な発表を行ったのである。これをやられてしまうと、極東日本でなかなかアーカイブ資料に頼ることのできない私は、自分がロート研究において大きなハンデを背負わされていると感じざるをえなかった。興奮とモヤモヤが入り混じった複雑な気分を抱えたまま、私は発表会場を後にし、サヴォイホテルへの帰路についた。

歩いている途中、だんだんと気分も落ち着いてきたのか、お腹もすき出し、今日はŁódźにいられる最終日だから、一回ぐらい正式なレストランで食事をしようと思い立った。私はこれまでお金を節約するために、夕食はケバブと、スーパーで買ったポーランドビールで済ませていたのである。Łódźのメインストリート、ピオトルコフスカ通りに出て、雰囲気の良さそうなレストランの物色を始める。そういえばサヴォイホテルの受付のお姉さんが、街の案内図にレストランが記載されたパンフレットをくれたな、ということを思い出し、私はそれをリュックザックから取り出してみた。そのパンフレットに目を向けた瞬間、私の背筋にゾクゾクと電流が走った。そこにはロート作品にも度々登場する、タリバリ（Tari Bari）の名前が冠せられたレストランが記載されていたのである。

舞台がパリの『聖なる酔っぱらいの伝説』に登場する、レストランのタリバリ亭では、ロシアやアルメニアの料理が提供される。しかし、私が訪れたŁódźのタリバリ亭では、主に魚介類を中心としたイタリア料理が提供された。パリ、ロシア、アルメニア、ポーランド、イタリアといった、様々な国のイメージが頭の中でグルグル廻っていると、愛想の良いウェイターが一皿目の料理と、ポーランドビールを運んできた。久しく食べていなかった魚の匂いに興奮し、魚介のダシが効いたスープの味に脳天を痺れさせながら、私はあっという間に一皿目の料理を平らげてしまった。このままでは無尽蔵に料理を食べてしまうのではという恐怖に駆られた私は、ポーランドビールをチビチビやりながら、呻きをあげる胃袋を何とか落ち着かせようとした。だいぶ冷静になってきたところで、次なる料理を頼もうとメニュー表を眺めていると、あることに気がついた。ポーランド語の綴りには「Z」、「Ł」「ó」といったようなものが多数あり、それらの文字がずっとこの旅の間、私にエキゾチックな印象を呼び起こしていたのである。そこで、私は「西の理性」と「東の野性」が激しく衝突する、ロートの後期作品『偽りの分銅』の舞台が、ズロトグロート（Zlotogrot）という表記であったことを思い出した。「Zlotgrotはロートの故郷であり、現ウクライナのガリチアがモデルである」という見立てが、先行研究における共通理解となっている。しかし、私の中に突如、「Zlotgrotの中にはガリチアだけではなく、ポーラ

ンドのŁódźも紛れ込んでいるのではないか」という疑念が浮かんできた。ロート作品の中には、ときとしてナショナリティにまつわる既成概念が曖昧となり、何か異質で新たなる空間が生まれる瞬間が存在する。そのロート作品の持つナショナリティに規定されえない異質さこそ、ロート研究がいまだなお世界中で発展し続け、極東日本にルーツを持つ私さえをも惹きつける魅力に他ならないのではないだろうか。だからこそ、こうも思った。アーカイブ資料や土着性にロート作品を落とし込むことは、その異質で魅力的な作品世界の拡がりを阻む危険性もはらんでいるのだと。

これまたZlotgrotを想起させるポーランド通貨の Złotyでお会計を済ませ、メインストリートに出た私は、酔いも手伝ってか、サヴォイホテルの方角を失した。延々と伸びていく長い通りの途上で、私は東西南北の感覚を失いながら、目の前で、まさに「東」や「西」といった概念が消失していく、ロートの小説世界を見ているような気がした。